



西遊補訳注（第五回～第八回）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-07-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大平, 桂一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004380

西遊補訳注（第五回～第八回）

大 平 桂 一

第五回

鏤青鏡より心猿は古こじんせかいに入り

緑珠楼にて行者は眉を攢む

〔鏤青鏡から悟空は古人世界に入り

緑珠楼で悟空は眉をひそめる〕

秦の始皇帝のためだけに心猿が錯乱してしまった。

さて悟空は天字第二号の彫金細工の古鏡の中をのぞきこんでみた。見れば、紫柏¹の大樹の中に石碑が一つ立っていて、「古人世界は原もと頭風世界の隔壁に係る」（古人世界はもともと頭痛世界のとなりである）と十二の篆字が刻まれている。悟空はつぶやいた、

「古人世界であるからにや、秦の始皇帝もその中にいるはず。おととい新唐の掃除をしていた女官が、奴は駆山鐸を持ってると言った。おれはやつをねじり伏せ、その鐸を奪い、西天への道中にある千山万谷をことごとく撤去し、妖怪も追い剥ぎも隠れ家や逃げ場をなくして追っ払ってやる」

まずい！大聖がまたもや鏡の中へ入ってしまった。

すぐに銅喰い虫に変身、鏡の表面へ這い上がり、ガブリと一口、鏡に喰いついて穴を開けた²。するとある高殿に転がり落ち、下の方から何人かの話し声が聞こえてきた。彼は正体を現わすのを避け、なおも銅喰い虫の姿のまま、緑色の飾り窓の隙間に隠れて様子を窺った。

実³は古人世界の中に、緑珠姫³と呼ばれる美人が一人、一日中客を招

1 紫柏 具体的にはどんな樹木を指すかわからないが、用例としては明代陳耀文『天中記』巻五十一に、「廣漢梁泉縣は漢の故道縣なり。龍女山に紫栢多し。華陽志に云う、梁泉に紫栢坂有り」とある。

2 この部分はルイス・キャロル『鏡の国のアリス』のやわらかな鏡とかなり趣向を異にしている。「西遊補私記（一）」『颯風』第42号19頁参照。

3 緑珠 晋の貴族・大富豪の石崇の愛妾、後に権力者孫秀にみそめられたが、石崇が彼女を手放さなかったため、石崇は収監・処刑された。『晉書』巻三十三石崇傳に、警吏が石崇を収監しに来た時、「崇は正に樓に宴し、介士門に到る。崇緑珠に謂いて曰く、我今爾の爲に罪を得たりと。

まっ先に一
群の女たち
にぶつかつ
た。

いて宴会ばかり、飲めや歌えのドンチャン騒ぎ。そのころあれこれ頭をひねり、百尺の楼台を建て、握香台と名づけた。ちょうどその日、西施夫人⁴糸糸嬢さま⁵がいっしょに新楼台の落成祝いにやって来たので、緑珠は大喜び、すぐに握香台に酒宴の支度をさせ、姉妹の情を固めるところに出くわした。正面中央に糸糸嬢が坐り、右には緑珠姫、左に西施夫人が坐り、扇香鬘の侍女たちが、お酌する者、花を摘んで来る者、サイコロの盆を捧げ持つ者、一団となってひしめきあっている。悟空は窓の隙間において、悪巧みを思いつき、すぐに侍女風に変身し、その中に立ち混じた。どう化けたかと言うと、

洛神の髻⁶、祝姫の眉、蘇詩祝小姫眉掃かず⁷、楚王の腰⁸、漢帝の衣⁹、

緑珠泣きて曰く、當に死を官前にて效すべしと。因りて自ら樓下に投じて死す。」以下、時代を異にする美女が集合して詩を詠みあうという趣向は、唐代韋瓘の「周秦行紀」から借りたものであろう。牛僧孺が旅の途中、「異香」に導かれて、ある大邸宅に入ると、そこは「漢文帝母薄太后廟」で、当夜は次々に歴代の美女すなわち漢の高祖戚夫人、王昭君、齊の潘淑妃、唐の楊貴妃が現れる。酒が数巡し、宴も酣になると、薄太后は「牛秀才は才子なり。盍ぞ各の詩を賦し志を言わんや、亦た善からずや」と述べ、各々一首ずつ詩を作る。最後に緑珠が潘淑妃に伴われて登場し、「此の日の人は昔日の人に非ず、笛聲空しく怨む趙王倫。紅は残れ翠は碎ける花樓の下、金谷 千年更に春ならず」という詩を作る。最後に太后が「牛秀才遠きより来る、今夕は誰人か伴と爲るや」と問いかけ、緑珠らは口々に辞退して、結局相方は王昭君に決まる展開など、第五回の内容に酷似する。

- 4 西施 越の国の美女范蠡の計略で呉王夫差のもとに送り込まれた。
- 5 原文は絲絲小姐 ＊董誥の父董斯張の著『呉興備志』卷三十詭徵第二十六之一に引く賈氏說林に、「沈休文（約）、雨夜の齋中に獨坐するに、風 竹扉を開く。一女子有り、絲を絡ぐの具を攜え、門に入りて便ち坐す。風 細雨を飄えすこと絲の如し。女は風に隨いて絡を引くに、絡繹して斷たれず。斷つ時は亦た口を就けてこれを續ぎ、真絲の若し。燭未だ跋に及ばずして數兩を得たり。起ちて沈に贈りて曰く、此れ氷絲と謂い君に贈る。造りて以て氷紈と爲せと。忽ち見えぬ。沈は後に織りて紈を爲るに、鮮潔明淨にして冰に異ならず。扇を製るに、夏日に當たり、甫めて手に在り、揺らさずして自と涼し。」とあるように、ここは沈約のもとに忽焉と現われて「氷絲」を残していった女性を「絲絲小姐」と呼んでいるらしい。後出の「沈郎」は無論「沈約」である。
- 6 洛神髻 伏羲の娘が洛水に落ちて溺死し、女神となった。名を宓妃という。「洛神髻」は、曹植「洛神賦」（「文選」卷十九）に、「御者對えて曰く、臣聞く、河洛の神は名を宓妃と曰う。然らば則ち君王の見る所は廻ち見無からんやと。」とあり、そのすぐ後に洛神の容貌を形容して、「雲髻は峩峩として、脩眉は睂娟たり」と言うのに基づいている。
- 7 蘇詩祝小姫眉掃かず 少なくとも蘇軾の詩詞にはこの句は見えない。また「祝姫」が誰を指すのか現在のところ不明である。
- 8 楚王の腰 『韓非子』二柄篇に「楚の靈王細腰を好み、國中餓人多し」とあり、楚の靈王好みの柳腰という意味である。
- 9 漢帝の衣 漢の武帝が平陽公主の邸第に行幸し、更衣の際に歌い女の子夫（後の衛皇后）を気に入る、厠で寵愛した故事を指すか。「漢書」卷九十七上外戚伝に、「帝起ちて更衣するに、子夫侍して衣を軒（厠を指す）中に尚り、幸せらるるを得たり。」とある。

上に秋風の墜つる有り、下に蓮花の盃有り。

[洛水の女神の髻、祝小姫の眉、楚王好みの細い腰、漢の武帝好みの衣裳、顔を秋風が吹きすぎ、足元には蓮花の盃のような足跡がついていく]

すると、侍女たちはみなオホホと笑い出し、「うちの握香台、ほんとに握香台¹⁰ そのものだこと。こんなに容姿端麗な女の子が家にいないで駆けつけて来るんだから」

さらに一人の侍女が悟空に向かって、

「ねえさん、あなた緑さまにお目見えして？」

悟空は言った、

「あねさん、あたしは新米です。連れてってもらいお目通りできたら嬉しいわ」

その侍女はニコニコしながら、緑さまにお目見えに連れて行った。緑さまはとともビックリして、ハラハラ涙をこぼし、悟空に向かって、「虞美人¹¹、長らくお目にかかっていませんでしたが、玉の顔に憂いが走るのなぜ？」

悟空は腹の中で、

「ハテおかしな、おれさまは石の中から生まれて以来、今日まで男や女の輪廻にはまったことはなく、花柳界に足を踏み入れたこともない。おれがいつ緑さまとやらと知り合った？いつ泥美人¹²、銅美人、鉄美人、草美人になった？でもやっこさんがそう言うんだから、おれが虞美人だろうとなかろうと、構うことあねえ、ちょっとからかってやれば、面白かるう。これぞまさしく「ましがいに懸乗りする将錯就錯」¹³というやつだ。ただ問題が一つ、もう虞美人になっちゃったんだから、ほかに虞美人の配偶者¹⁴がいるは

10 握香台 唐代韓偓に主に女性美を詠じた『香奩集』があるように、「香」は美女を喩えることが多い。

11 虞美人 項羽の愛妾。美人は側室の称号である。

12 泥美人 「泥」と同義の淤は虞と同音、以下の「銅美人、草美人」は連想によるしゃれである。

13 将錯就錯 『二刻拍案驚奇』卷二十二「痴公子狠使噪脾錢、賢丈人巧賺回頭婿」に巨万の富を相続した公子が、取り巻きにたばかられ、金をむしり取られる場面に、「公子便有些曉得、只是將錯就錯、自以爲得意」（公子はうすうす気付いていましたが、ましがいを放っておき、かえって得意になっていました）とある。

14 原文は「配頭」。用例としては、『初刻拍案驚奇』卷二「桃滴珠避羞惹羞、鄭月娥將錯就錯」に、「我家有個表姪女新寡、且生得嬌媚、尚未有個配頭。」（我が家には未亡人になったばかりの姪がおります、美貌ですがまだ配偶者がおりません）とある。

ず。もし不意に尋ねられたら、「驢頭不對馬嘴^{きになげをつぐ}」で、すぐに正体がバレそう。まずちょっと探りを入れて、配偶者を一人見つけ出した後で、ちゃんと席につこう」

緑さまはさらに、「美人」と呼びかけ、「すぐに席について。大した酒じゃないけど、結構憂さ晴らしになるわ」

悟空（虞美人）はその時、風雨に打たれた、もの寂しげな表情を作り、緑さまに向かって、

「ねえさん、酒の楽しみは腸までしみる、というけれど、あたしは夫と会えなくて、雨につけ風につけ、ずっと断腸の思いがつづいている。どうして酒がのどを通りましょう」

緑さまは顔色を変えて、

「美人、いったい何をおっしゃるの。あなたの夫はすなわち楚の霸王項羽。今現にいっしょにいるのに、なんで会えないの？」

悟空（虞美人）は「楚の霸王項羽」の五文字をもらって、すぐ口から出任せに答えた、

「ねえさん、あなたはまだ今の楚王が以前の楚王と違うのをご存知ない。宮中に楚騷¹⁵という美女がいて、ありとあらゆる媚態を作って夫を誘惑し、あたしたち夫婦の仲を裂こうとしています。ある時はお月見、あたしは池の水草なんか見ていないのに、あの子は欄干にもたれ、立ち去りがたい様子で物思い、夫は「見るだに艶っぽいのお」だって。ある時はお花見。あたしは酒の支度などさせてないのに、あの女ったら部屋から水裂紋の酒壺を大事そうにかかえて持ち出し、酒壺の中の、紫の花を浮かせた美酒¹⁶をすすめながら、「長寿千年の大王さま」と舌先三寸、別れ際には目をひたすらクルクルまわし、夫の方も流し目使ってあの女を見送ります。わたしはもともと愛情深く、夫とともに共白髪と思っているのに、あの二人はあたしを置物あつかい。どうして悲しみ恨まずにいられますか？

その時夫は「お前はあの子を見下してる」と言ったり、「楚騷をいじめる」と言ったり、枕元にあった剣を手にとって背負い、供も連れず、

15 楚騷 「西楚の霸王」（項羽）と『楚辞』の離騷にひっかけた名。

16 紫の花を浮かせた美酒 原文は「紫花玉露」。「玉露」が美酒を喩えるのは、元代顧阿瑛の「水調歌頭天香詞」に、「金粟は仙樹を綴り、玉露は人の愁いを流う。」などが用例である。

サッサと出て行き、どこへ行ったやらわからないの。二十日前に出て行って、半月余りまだ何の音沙汰もありません」

話し終えて大声で泣きだした。

緑さまはそれを見て、薄絹の衣を片袖涙で濡らし、西施・糸糸も一緒に愁嘆場となり、酒壺を持つ侍女も腹の底から泣きの涙、ワンワンオオオ、ひどく悲しみ出すのであった。これぞまさしく「愁人は愁人に向いて説く莫かれ、愁人に説かば^{ますます}転愁えん」（悲しんでいる人に悲しみを語ってはならない、悲しんでいる人に悲しみを語れば、ますます悲しみがつのる）¹⁷という情景。

四人の席がやっと決まると、西施が言った、

「今夜は美人はご機嫌斜め、わたしたちであれこれ気持ちをほぐしたげましょう。これ以上悲しませちゃだめ」

即座にサイコロ六つを手に握り、

「さあ一座の皆さん命令よ」と声高に、

「第一投では^{いち}么は無し¹⁸、出たらめいめい古詩を一句歌うこと。第二投では二は無し、出たらめいめい色恋の情を披露すること。第三投では三は無し、出たら親が大盃で罰盃ひとつを飲み干し、ただちに他の客にまわす」

西施はサイを空中に投げ上げ、声高に、

「第一投では^{いち}么は無し！」と叫んだ。緑珠が嬌声を揚げて詩を一句、

夫君来たらず涼夜長し¹⁹

糸糸がほめちぎり、笑いながら、

「この句はうまい掛詞²⁰になっているわ」

と、やはり詩を一句、

玉人の環佩 正に秋風²¹

悟空はその時思った、

17 愁人は愁人に向いて説く莫かれ、愁人に説かば^{ますます}転愁えん 『五燈會元』卷十四廣徳周禪師の条に、「愁人は愁人に向いて説く莫かれ、愁人に向かいて説かば人を愁殺せん」とある。

18 第一投么は無し 「么」は「一」に同じ。宴席の余興である酒令のルールは不詳。

19 ＊明の宋濂『文憲集』「夜涼曲」に「夫君 来たらず 涼夜長し」とある。

20 掛詞 寂しい涼夜と折角の良夜が掛けられている。

21 ＊明の湯頭祖『湯頭祖全集』卷十三「夜 松陽の周明府琴を鳴らすを聴く四首の二」に、「未だ清音の轉た嘹唳たるべからず、玉人の環佩 正に秋風」とあるのを用了。

「今度はおれさまのところへまわってきそうだわい。おれは他の文章なら少しは覚えてはいても、詩と聞いただけで頭が痛くなる。おまけに虞美人は詩ができるのかできないのかも知らない。もしできないならまだましだ。もしできるなら、こりゃまた羊頭狗肉だ。

緑さまは、「美人一句歌って」と執拗に勧めてくる。

悟空はそこで謙遜なのやら口実なのやら、嘘か真か曖昧に答えて、「あたし詩はできません」と言った。

西施が笑って、「美人の詩選²²は国内にあまねく普及し、たとえ三尺の童でも、虞美人は詩も上手賦も上手の才女と知ってるわ。今日はそんな言い逃れをされて」

悟空はどうにもならず、天を仰いであれこれ知恵を絞り、しばらく考えにふけた末、一座に向かって言った、

「古人の既成の句を使わなくてもいいかしら」

緑さまが、「そのことは酒令官^{おや}に聞かなきゃ」

悟空はさらに西施に尋ねた。

西施「そりゃ何にも問題ないわ。美人の作は古人の詩句そのものだから」

皆耳をそばだてて聞いていると、悟空が詩を一句、

懺悔の心は雲雨に随って飛ぶ²³

緑さまが糸糸に尋ねて、「美人のこの句はいかが？」

「美人の詩ですから、よくないなんて誰が言えましょう。でもこの句にはちょっと坊主っぽい雰囲気があるわ」

西施は笑って、「美人はもともと半月ほどメスの坊主になってるんだから」

22 美人の詩選 もちろんそんなものは存在しないが、『史記』卷七項羽本紀の四面楚歌の場面で、「美人これに和す」に対し、正義が引く『楚漢春秋』に、「(美人) 歌いて曰く、漢兵已に地を略し、四方楚歌の聲。大王 意氣盡きて、賤妾 何ぞ生くるを聊わん」と虞美人の歌が載せられており、西施はおそらくこれを指して「たとえ三尺の童でも、虞美人は詩も上手賦も上手の才女と知ってるわ。」と述べているのである。

23 *『湯頭祖全集』卷十五「長脚(屠隆) 情寄の瘍に苦しみ、筋骨段壊し、號痛 忍ぶ可からず。闔舎(?)を教令て觀世音を念ぜしめて稍や定まる。戯れに十絶を寄す」の第五首に、「雌風の病骨 何に因りて起こる、懺悔の心は雲雨に随って飛ぶ」とある。「闔舎」の二字不明。博雅の賜教を乞う。

悟空「からかわないでちょうだい。さあ酒令官は盆をまわしてね」

西施はあわててサイコロの盆を緑さまにまわします。緑さまは手を高くあげてサイコロを投げ、声高に「第二投は二無し」と叫んだ。

そこで西施が言う、「あなたたち披露しやすけれど、わたしは披露しにくいわ」

緑さま「ねえさん、何が披露しにくいの？」

西施「チェッ！わざと人に恥ずかしい思いをさせて。わたしは夫が二人²⁴だってことを知らないの？」

緑さま「まわりはみな姓こそ違え、肉親同様、何の差し障りがあって？
妹が話の筋道をつけたげよう。さあねえさん、一句で呉王〔夫差〕を披露して、一句で范〔蠡〕さまを披露してはいかが？」

西施はそれを聞き、ただちに披露します、

范郎 柳溪²⁵の青歳²⁶

呉王 玉闕²⁷の紅顔²⁸

范郎 崑崙²⁹日に誓い

呉王 梧桐 夜に眠る

范郎 五湖²⁹ 月に怨み

呉王 一醉 天に愁う

〔范郎 柳溪で過ごした青春の日々

呉王 宮殿で暮らした若き日々

范郎 崑崙山にて昼に誓いを立て

呉王 梧桐の木の下で夜眠りこける

范郎 五湖で月に向かって恨み言を述べ

呉王 一たび酔っ払って天に向かって悲しむ〕

24 夫が二人 西施は范蠡により呉王夫差に献上され、呉の滅亡とともに范蠡のもとにもどった。

25 柳溪 浙江省の地名柳溪江らしいのだが、范蠡との関連はわからない。

26 青歳 用例としては李白「淮南の友人に寄す」詩に「紅顔 舊國を悲しみ、青歳 芳洲に歌う」とある。

27 玉闕 唐太宗「簾を賦す」詩に、「參差 玉闕に垂る、卷を舒べて蘭宮に映ず」とある。

28 紅顔 注(26)を見よ。

29 五湖 越王を補佐して呉の国を滅ぼした范蠡が、その後に隠棲した場所、太湖の近くとされる。『呉越春秋』巻十勾踐外傳に、「〔范蠡〕乃ち扁舟に乗りて三江より出でて五湖に入る、人其の適く所を知る莫し」とある。

緑さまは聞き終えると、盃で拍子を取りつつ披露、

妾の珠 一斗

妾の涙 万石

今夕 握香

他年 傳雪石家に伝雪楼³⁰有り

[私の真珠は一斗、私の涙は一万石。今宵は 握香台にて宴を催し、往時には傳雪楼で夜会を開いた。]

緑さまは一声ごとにため息一つ。

西施は声高に「敵罰よ！」と叫び、「わたしは楽しい句を披露してと頼んだのに、悲しい句を披露してしまつて。」

緑さまはあやまって罰盃を受けた。

その時糸糸は悟空に先を譲り、悟空は糸糸に先を譲り、押し付けあつて長い間披露しない。

緑さま「わたしに一つ手があるわ。糸糸ねえさんが一句言つて、美人が一句言つたら？」

西施「それはだめ。だって楚の霸王は威風堂堂、沈玉郎³¹は柔弱温順、どうして対にできます？」

糸糸が笑つて「構わなくてよ。あっちはあっち、こっちはこっち。わたしに先に披露させてね」と言い、歌つた、

月に南樓に泣く

[南樓で月を見上げて泣く]

悟空は咄嗟のこと不注意に口から出任せに披露して、

仏を西天に拝す

[西天竺で仏を礼拝する]

緑さまは悟空を指さして、「美人あなた頭がおかしくなったんじゃないの？なんで「仏を西天に拝」さなくちゃならないの？」

悟空「意味深長なんだから、講釈が必要なのよ。天とは夫なり、西とは

30 傳雪楼 石崇の家に「傳雪楼」があつたとする伝説は今のところ探し出せない。

31 沈玉郎 沈約を示す。注(5)を見よ。

西楚³²なり、拜とは婦なり、仏とは心なり³³。つまり心を西楚の丈夫^{おっと}に帰するということ。あの人はあたしにうんざりだけど、あたしはひたすらあの人を思ってるの」

緑さまはいつまでも感動にひたっていた。

悟空は宴席に長居してしまい、予定が狂うのを恐れて、酔って吐きそうな格好を装った。

西施は言った、「第三投はもういいから、お月見しましょ」

即座に宴席は片付けられ、四人は高樓を歩み下り、ぶらぶらと草花を踏み分け、水草をもてあそんだ。

悟空は秦の始皇帝を探したい一心で、遁走の計略を用い、

「胸が痛くてたまらない、たまらない、わたしを帰して」

とひたすら叫んだ。

緑さま「胸の痛みはわたしら毎度の事だわ。まあ心配しなさんな。誰かに岐伯³⁴を呼んで来させて、美人の脈を診てもらいましょう」

悟空「だめ、だめ。近頃の医者は何より近づけちゃだめ。生きてる人間を殺し、軽い病気を重くする。治療の時には即効性ばかり考えて、人の命なんかおかまいなし、脾臓の気がまだ回復してないのに、高麗人参やお朮^{おけら}を飲ませ、おかげで一生体調不良に悩まされたり。やっぱり帰らせてもらうわ」

緑さま「美人は帰って楚王に会えないとまた気鬱になり、楚騒に会ったらまた恨めしがる。心の病には気鬱と怨恨が一番毒よ」

姉妹たちはみんな悟空を引き留めようとしたが、悟空は決して留まろうとはしなかった。緑さまは美人の病が切迫しているのを見て、もはや引き留めきれず、やむを得ずおつきの侍女四人に命じ、虞美人を楚王府ま

32 項羽が諸將をそれぞれ王として立て、自らは「西楚霸王」と称したので、悟空が「西とは西楚なり」と解釈してみせたのである。『史記』巻七項羽本紀に、「項王は自立して西楚霸王と爲り、九郡に王たり、彭城に都す」とある。

33 仏とは心なり 初期仏教では二十四時間心の動きを見つめ続ける修行法が実践された（『念處經』など参照）。また『五燈會元』巻二牛頭山法融禪師の条に、「祖問いて曰く、此に在りて甚麼をか作すと、師曰く、心を観ると」とあり、「仏とは心なり」とはこのような文脈で発せられた言葉なのであろう。

34 岐伯 古代の名医で、黄帝の臣下、黄帝と岐伯の医学をめぐる対話が『黄帝内經』であるとされる。

で送らせることにした。

悟空は胸を抱えまぶたがくつつきそうな顔をして、姉妹と別れた。四人の侍女が悟空の脇を支え、百尺の握香台をどンドン下り、一本の大道に沿って進んでいった。

悟空「おまえたち四人はもうお帰り。あたしのために重々お礼を言って、そして奥様やお嬢様に、明日またお会いしましょう、と伝えてね」

侍女³⁵たち「たった今出しなに、緑さまは楚王府までずっとお送りしなさいとお言いつけにられました」

「てめえらやっぱり帰ろうとしねえか、棒でも喰らえ！」

金箍棒が早くも手中に抜かれており、さっと一振り、侍女四人は叩きのめされて紅おしろいに変えられてしまった。悟空はただちに正体を現わし、ふと上を見ると、まさしく女媧³⁶の門前であった。

悟空は大喜び、

「うちの天は、小月王が派遣した踏空使者の一隊にずぼろ穴を開けられ、昨日に自分の身に罪名を着せられた。太上老君は憎いやつ、玉帝は分からず屋だが、おれさまにも落ち度がある。やらなきゃよかったんだが、五百年前に話の種を作っちゃった。もうこれで自分で汗を流さなくていい。女媧は前から天の補修に慣れてるそうだから、今日はひたすら女媧に頼み込んで、代わりにちゃんと補修してもらい、それから凌霄殿に泣きつきに上がって、冤罪を晴らしてもらおう。これはとってもいい機会だ」

門口に近づき、じっと見てみると、黒い漆塗りの門扉が二枚びったり閉まり、門に貼る紙が一枚、「二十日軒轅³⁷の家に至りて閑談し、十日にして乃く帰る。尊客を漫にする有らん、先め此に罪を布ぶ」[二十日ようやに黄帝の家に行って閑談し、十日間したらようやく帰って来ます。あなた様をおもてなしすることもできません。予め謝罪申し上げます。]

悟空は読み終わり、回れ右してすぐ出発した。すると、耳にニワトリ

35 侍女たち 原文は「女使」。『警世通言』第六卷「兪仲舉題詩遇上皇」に、「過了兩日、女使春兒見小姐（卓文君）雙眉愁蹙、必有所思」（二日たち、侍女の春兒はお嬢様が眉をひそめ、何か物思いにふけているのを見て）という用例がある。

36 女媧 神話時代の女帝、伏羲の妹とも妻とも言われる。天地が崩れた際、五色のレンガで天を補修した。

37 軒轅 黄帝のこと。『史記』卷一五帝本紀に、「黄帝なる者は、少典の子、姓は公孫、名は軒轅」という。

の鳴き声が三度聞こえ、もう未明の空だった。数百万里来たのに、秦の始皇帝はまったく見つからなかったのである。

（評）女たちがからかいあう場面は絵のように美しい。艶はあるが太りすぎず、あたかも清楚で細身の梅の花に似る。

第六回

半面の涙痕 ほんもののがじん 真美 死し

一句 蘋香 楚將愁う

[顔半分を涙で濡らし(た悟空にたぶらかされて)本物の美人は殺され、「蘋香を妾にいかか」の一言で楚の將軍は憂愁にとられる]

ふと見れば色黒の男が一人、高殿に坐っていた。悟空笑って、

「古人世界にも賊がおるわい。顔中真っ黒に塗って、こんなところでさらし者になってる¹」

何歩か進んでから、

「賊じゃない。実はなんと張飛廟だった」

またちょっと考えてから言った、

まさに噴飯物。

「張飛廟である以上、頭巾をかぶってるはず。たとえ今風にしても、かわりに將軍帽をかぶるはず。皇帝の冠だってむやみにかぶれるもんじゃない。皇帝の冠をかぶり、おまけに黒い面だ。これはきつと大禹玄帝²

話を持ち出して来た。

に違いない。さっそくお目通りして妖怪退治の秘訣の数々を聞き出そう。もう秦の始皇帝を探す必要はなくなった」

この四字
(先漢名士)
は新奇。

それを眺めながら前まで来ると、楼台の下に石の旗竿が一本、竿には飛白の書体で紫色の字が四つ書かれた旗が挿され、

先漢³名士⁴項羽

- 1 さらし者になってる 原文は「示衆」。『漢書』卷五十三劉去傳に、「其の十五人は、赦前に在るも、大惡仍りに重ぬ、當に顯戮に伏して以て衆に示すべし」とある。
- 2 大禹玄帝 三皇五帝の最後の禹帝。その顔が黒かったことについては、『太平御覽』卷八十二夏帝禹の条に、「又曰く、舜の崩するや、禹服喪三年、朝夕號泣し、形體枯槁し、面目黎黒たり」とある。これは服喪の際の様子であるが、『西遊補』のこの条と関係があるかもしれない。
- 3 先漢 普通は前漢を指した。諸葛亮「前出師表」に、「賢臣に親しみ、小人を遠ざく、此れ先漢の興隆する所以なり」とあるのが、その用例である。しかし、ここでは「漢に先んずる」時代、すなわち漢が全国統一する以前の時期を指し、「先秦」と同じ用法である。
- 4 名士 名望は高いが朝廷に仕えようとはしない人(『漢語大詞典』の定義による)。用例としては、漢の桓寬『鹽鐵論』卷四褒賢第十九に、「萬乘の主、體を屈し辭を卑くして、重幣もて交りを請わざる莫し、これいわゆる天下の名士なり。」「禮記」月令「季春の月、諸侯を勉まし、名士を聘し、賢者を禮せしむ」に対する唐の孔穎達疏に、「名士なる者は、其の德行卓絶、道術通明にして、王者は臣とするを得ず、隱居して位に在らざる者なり」とある。項羽はもちろんこの名士の定義にあてはまらず、わざとからかっているのである。錢鍾書は『談藝錄』第一冊史記會注考證九律書で董説が項羽に名士を標榜させていることについて、「董説『西遊補』第六回に西楚霸王の醜態を刻劃し、幟を樹て銜を署して曰く、「先漢の名士項羽」と。律するに張輔の「論」(訳者注、「名士優劣論」を指す)を以てすれば、項羽は未だ嘗て名士と稱す可くんばあらざるも、然れども標を挿し自ら貨り、己を揚げ人に炫る、董氏の諷する所、意は斯に在り」と面白がっている。

悟空はそれを見て、ひとしきり大笑いして、

「全く「事未だ来たらざる時は去すんで想うを休めよ、想い来るも到底心の如からず」「事も起こっていないのに、それを思い悩む必要はない、思い悩んだところでその通りにはならない」という諺の通りだ。おれさまはあれこれ疑問に思っ、いや大禹玄帝ではないか、いや張飛ではないか、いや逆賊強盗ではないかと思ってみたりしたが、なんとどれもちがっていて、緑珠の楼上からはるか離れたおれ(虞美人)の夫だったとは」
ただちにまた別の考えが浮かび、

話を持ち出して来た。

「ありゃりゃ、おれはただひたすら秦の始皇帝を探し、やつから駆山鐮を借りようとして古人世界へもぐりこんだ。楚の霸王はやつの後だが、もう会えた。だがやつ本人にはなぜ会えない？おれに一つ考えがある。すぐに階上へ踏み込んで行って項羽に会い、始皇帝の消息を尋ねる、それこそ確かな情報だ。

悟空はすぐに飛び上がり、つぶさに見ると、高殿の側、朱塗りの欄干に碧の草、花咲き乱れ鳥が騒ぐ場所があり、美女が一人坐っていて、耳に虞美人、虞美人、と呼びかける声が聞こえてきた。悟空笑って、
「緑珠の楼上のおれさまが今ここにいるぞ。あちらさんの生き死になんぞ知ったこっちゃない」

悟空はただちに体をひと揺すり、元どおり美人の姿に変わり、なんと高殿に上ってしまった。袖から一尺の白絹を取り出し、涙をずっと押えっぱなし、ただ顔半分をのぞかせ、項羽の方を見、恨んでるようでもあり、また怒っているようでもある。項羽はびっくりして、大あわてで跪くと、悟空はくるとそっぽを向き、項羽はまた悟空の前へとすっ飛んで行って跪き、

「美人、お前の相方を憐れんでちょっとは笑顔を見せておくれ」と叫んだ。

悟空は声も出さない。項羽はどうすることも出来ずいっしょになって号泣する⁵ばかり。悟空はそこで初めて花の顔かんぼせを紅潮させ、項羽を指さし、
「ろくでなし、あんたは名声赫々たる將軍のくせに、女一人庇えず、ど

古今の英雄は皆色事から逃れられない。とは言え項羽はケタ外れだ。項羽は一生涯よく号泣した。

5 原文は「陪哭」。いっしょに号泣すること。『魏書』卷八十三上外親傳馮誕の条に、「(北魏の高祖)遂りて親しく誕の墓に臨み、車を停めて哭す。彭城王勰をして群官に詔して朱衣を脱し、単衣介幘を服し、司徒に陪哭せしむ」とある。ここでは項羽が虞美人につきあって号泣しているのであるが、それを「陪哭」と重々しく表現することによって苦笑を誘っている。

の面下げてこの御殿に坐ってるの？」

項羽はただただ泣くばかり、まともに返事も出来なかった。悟空はいささか見るに見かねた態で、手を差し伸べて助け起こし、

「ことわざに、「男兒の兩膝には黄金有り」⁶とか。あなたは以後むやみに跪いてはだめ」

大豪傑、大豪傑、この世で色事を解さぬやつは、快男兒に非ず。項羽は天下一流の情人、屈原・宋玉などはやはり二流にすぎん。

「美人、いったい何を言っているんだ。おれはお前が眉をちょっと擧めるのを見ただけで、心臓も肺もみな粉々だ。この七尺の体軀⁷なんか氣にかけてどうなる。おまえおれに言ってくれ、一体どうしたんだ？」

「大王さま、やっぱりあなたはだませないわ。あたしはちょっと調子が悪くて藤の寝椅子で半時眠りました。ふと見ると、窓際の玉蘭からサル妖怪が一匹飛び出して、五百年前に天宮を大混乱に陥れた斉天大聖菩薩孫悟空と名乗ったの」

項羽はそれを聞き、すぐに飛び上がって大声でどなり、わめきちらした、

「俺の宝玉散りばめた枕刀を持って来い、刀を持って来い、刀が見当たらなきゃ虎頭戟だ」

項羽は頭をかきむしり、足を踏み鳴らし、大喝一番、「今どこにいる！」

悟空は腰をかがめ、

「大王さま、そんなに癪を立てないで。癪を立てるとご自分のお体にさかります。わたしがゆっくりとお話ししたげるから。そのエテ公ときたら、本当に憎たらしいんだから。なんと寝椅子の側まで来て、あたしにいたずらするの。あたしはつまらない女だけど、道理もわかまえぬ、貞操観念のない人間になってたまりますか。すぐに大声で侍女を呼んだわ。でもエテ公のやつ、どんな金縛りの呪文を唱えたのかわからないけれど、侍女一人として来なかった。侍女を呼んでも来ないので、何か変だと思って、あわてて団扇を放り出し、きちんと身づくろいしたの。あのサルはわたしを恐ろしい目つきで睨みつけ、わたしをひつつかんで、花雨楼

本物の悟空がニセの虞美人に化け、ニセの虞美人が本物の悟空について語る、甚だ奇怪だ。

6 「男兒の兩膝には黄金有り」 用例としては『清平山堂話本』卷三の「陰鷲積善」に、真珠の入った袋を落とした張客が、それを拾ってくれた林積ひばますに会い丁寧ていねいに挨拶した時に、林積がいった言葉、「男兒の兩膝には黄金有り、如何いかにぞ人に挿ひくや」がある。

7 原文は「七尺軀」。男性の標準身長で、当時の度量衡によれば157.1cm。転じて「堂々たる男子」の意味となる。用例としては、『荀子』卷一勸學篇「小人の學は耳より入りて、口より出ず。口耳の間は則ち四寸のみ、曷いかにぞ以て七尺の軀を美するに足らんや」とある。

に放り出し、パッと振り向くと飛んで行っちゃった。あたしは花雨楼の中で、あたふたしながらやつがどこへ行くかを盗み見たけれど、大王さま、やつがどうしたとお思い？まあなんと花蔭の藤の寝椅子のところに行って坐り、あたしの姿に変わり、下僕や下女を呼んで一休み。さらに大王を迷わせようとしてるの。あたしの体はどうなってもいい。ただ大王が本物ニセ物の区別がつかず、やつの毒牙にかかるのだけが心配。あたしの痛哭はほんとに大王さまのため」

項羽は聞き終わると、左手に刀を引っさげ、右手に戟を取り、大喝一番、「殺してやる！」

高殿から飛び降り、ただちに花蔭の寝椅子へと駆け寄り、虞美人の首を斬り、血がタラタラと滴り落ちるのを蓮池の中へ放り込み、侍女たち大勢に言いつけた、「泣きわめいたりしてはいかん！こいつはニセのお妃で、わしが成敗した。ほんとのお妃は高殿の上だ」

侍女たちは涙をためつつ、大慌てで項羽について高殿に上り、悟空を見ると、一同めいめい悲しみ転じて喜びとなり、「やっぱり本物のお妃はここにいらっしゃった。すんでのところでしたち驚死するところでした」

項羽はその時上機嫌、「階下の腰元たち、急いで花雨楼を掃き清めよ、念入りに酒宴の支度をせい。一つめにはお妃に気を静めて頂き、二つめには孤家^{それがし}⁸が妖怪を退治した祝いじゃ」

下の方から一斉に「承知いたしました」と声が返って来た。

その時高殿の上に侍女たちがみな参上して、悟空のために、胸をさすり背中を撫で、やれお茶やれお水、「お妃さま、びっくりして心臓が縮みませんか？」と尋ねるものもあり、

悟空「ちょっとはね」

「ころんで下半身にお怪我はありませんか？」と尋ねるものもあり、

悟空「そっちの方はなんともないが、息が苦しくてたまらない」

8 孤家 「孤」は単独でも諸侯や王の自称となる。例えば『史記』卷四十四の魏世家に、「衛君曰く、先生果して能くせば、孤請う、世世衛を以て先生に事えんと。」とある。「孤家」は近世の用語であろうか。

項羽「息が苦しいのはどうてことない。気を落ち着けてしばらく坐っておればすぐ直る」

すると、二人一組の侍女が登場し前に跪き、「大王さま、お妃さま、どうぞお席へ」と言上した。

悟空は心の中で、「何でもかんでもそっちの言いなり⁹にならなくてもよからうて」

ニセの虞美人が本物の虞美人を殺すのも奇怪だが、本物の悟空がニセ悟空を演じるのは更に奇怪だ。

たちまち気の触れた真似をして¹⁰、両目をカッとばかり見開き、項羽に向かって、「おれの頭を返せ」¹¹と言った。

項羽はびっくりして、「美人、美人」と連呼したが、悟空は答えず、延々白目を剥いたままである。

「言うまでなく、こりゃ孫悟空の幽魂が消散せず、またもや美人の体に取り付いたのだ。早いところ黄衣の道士¹²を呼んで来て、妖気を退散させてやれば、自然に回復するだろう」

すぐに侍女二人が一人の黄衣の道士を連れ、高殿の上にやって来た。その道士は手に鈴を持ち、口から法水¹³を吹きながら、真言^{じゅもん}を唱えた。

三皇の時¹⁴、軒轅黄帝、大舜神君有り。大舜名は虞氏、軒轅の姓は公孫。孫と虞、虞と孫、原^{もと}は婚姻す。今朝は冤結ばれば、那んぞ清明^は

9 何でもかんでもそっちの言いなり 原文は「千依萬順」。少し字面は異なるが、「千依百順」の用例は、『初刻拍案驚奇』巻二十七に、「凡是船家叫他做些甚麼、他千依百順。」(船頭が彼女に何か言いつけると、彼女はすべて言いなりになった)とある。

10 気の触れた真似をして 原文は「裝做風魔之狀」。『古今小説』巻三十一に、冥界の裁判において韓信の謀士蒯通が弁明する場面がある。その中に「某那時懼罪、假裝風魔、逃回田裏」(私はその時罪を恐れ、狂人を装って郷里に逃げ帰ったのです)という用例がある。

11 俺に頭を返せ 『記』第十四回に、魏徴に首を斬られた龍王が太宗の夢枕に現れる場面、「正朦朧睡間、又見涇河龍王。手提着一颗血淋淋的首級、高叫、「唐太宗！還我命来！還我命来！…」」(意識朦朧として眠っていると、またもや涇河の龍王が夢に現れた。手に血の滴る首を下げ、大声で、「唐の太宗よ、俺の命を返せ！俺の命を返せ…」と叫んだ)を連想させる。

12 黄衣の道士 黄衣は道士の着る衣服、韓愈の「華山女」詩に、「黄衣の道士も亦た講説し、座下寥落として明星の如し」とある。

13 法水 道士が病気治療に使う水。お札を焼いた後の灰を水に混ぜたり、あるいは左手の親指、人差し指、小指で鼎の足を作り、そこに水を入れた茶碗をのせて鼎に見立て、右手の人差し指、中指で剣の形を作り、水に向かって(水、火、土、金、…)などの文字を書きつけると出来上がる。

14 三皇の時 黄帝と舜を持ち出して、孫悟空と虞美人は親戚だと主張し、虞美人に取りつくのはやめてくれと懇願するナンセンスな祝詞。『補』第十回にも、「おまけにたった今エンマ大王の臨時代理になって、秦檜一名をギタギタに処罰したばかり。考えてみりゃ、秦の始皇帝も秦だし、秦檜も秦で、始皇帝の子孫でなきゃ、やつ一族だ」とあって、国名の秦と姓の秦を強引に結び付ける論理が共通している。

る¹⁵を得ん。伏して願わくは孫先生大聖老爺、行者の威靈¹⁶、早やかに上界¹⁷に飛び、再び天宮を闢がし、虞美人を放ちて、唐僧を尋ねんことを。急急に令の如くし、道士功無くして、又和尚の来臨を要むる省得^{てまをはぶ}かれんことを。

〔三皇の時代に、軒轅氏の黄帝と大舜神君がいた。大舜の名は（有）虞氏、軒轅の姓は公孫で、孫と虞、虞と孫はもともと通婚していた。今朝両家が憎みあうことになったが、この怨恨はいつ解けるのか。伏してお願ひ申し上げる、孫先生、斉天大聖の旦那さま、孫行者の荒ぶる魂よ、速やかに天界に飛び上がって、再び天界で大騒ぎを起こし、虞美人を解放して唐僧を探しに行かれますよう。私の祈祷が効験なく、和尚を呼びに行くなんてことにならぬよう、ただちに言う通りにされますように〕

悟空はそこで、「道士、おまえはおれが誰か知っておるか？」

道士は跪き、「お妃さま、ご機嫌うるわしゅう」

悟空はわめきちらし、

「道士、道士、おまえはおれを追い出せっこない。おれさまは斉天大聖だ。恨みを晴らそうと、この体にとりつき、たたりを為しているのだ。今日は大安吉日、断然虞美人と縁組してみせる。おまえは間に立って仲人になれ、仲人の礼金をせしめるのもよからうて」

言い終わると、また訳のわからぬこと¹⁸をわめくのがあった。道士は恐怖のあまり手足がしびれたが、やむを得ず剣を取って前に進み、こわごわ一振り、少量の法水を口から軽く吹き出し、声低く、「太上老君急急如律令」¹⁹と唱えたが、いくら唱えても効き目がなかった。

悟空はひそかにその道士に同情したので、両目をパッと開き、「大王

15 清明 政治や裁判が公正に行われていることを表す。蘇軾「司馬溫公神道碑」に、「上 位に即くの三年、朝廷は清明たり。」ここでは怨恨がきれいに解消することを言う。

16 威靈 「威靈」は荒ぶる魂を指す。『楚辭』國殤に、「天時は墜ちて威靈は怒り、嚴殺し盡くして原野に棄つ」とあり、天界を騒がせた悟空の魂に呼びかける言葉としてふさわしい。

17 上界 「上界」は天界を指す。用例としては、張九齡「紫蓋山を祠り玉泉山寺を經る」詩に、「上界に佛影を投じ、中天 梵音揚がる」とある。

18 原文は「無頭話」。これは「無頭冤狀」「無頭公案」と同様、わけのわからぬ、理解しがたい言葉を意味するのだろう。

19 太上老君急急如律令 「急急如律令」は、もと漢代の公文書で最後に書かれる決まり文句。「至急この文書の通りに実行せよ」の意。道教ではそれに「太上老君」を加え、祝詞やお札の末尾にも書くようになり、日本にもこの習俗は入って来た。

さま、あなたはどこに？」

項羽は大喜び、すぐに黄衣の道士に小粒の金百両を与え、道観に送り返させ、急いで悟空を助け起こし、

「美人、お前はなぜこうも人をびっくりさせる？」

「あたし全然覚えてませんでした。ただ寝椅子の側にいたサルがまたやって来たと思うと、すぐに意識がなくなって、道士に法水を一口かけられたら、あいつの足元がふらついて、まっすぐ西南の方へ行っちゃうのが見えたわ。今じゃとってもスキッとしてます。お酒飲みに行きましょ」

項羽はそこで悟空の手を取って高殿を下り、花雨楼に行き席に就いた。見れば鳳の灯は秀を擺き、桂燭は暉を飛ばし、多くの侍女たちが列を作って立っているのだった。盃が数回まわったところで、悟空は突然立ち上がり、項羽に向かって、

「大王、あたし眠るわ」

項羽はあわてて、「麝香、丫頭、灯りをつけて」

二人はまた手を取り合って寝室へ入り、芥茶²⁰を一杯飲み、寝椅子に肩をならべて坐った。

悟空はその時ひそかにこう考えた、

「もしすぐに逃げたら、秦の始皇帝の消息を聞かずじまいになる。もしもやつといっしょにベッドのカーテンの中に入った時、やつがおれに手を出して来たら²¹その時はやつの言うことを聞くもよし、逃げの一手を用いるのもよからう」

そこで項羽に向かって、

「大王、あなたにお話があります。ずっと言おうと思っていたけど、いろいろ忙しくて、あなたの顔を見ては忘れてしまったの。わたしが大王の側に来てから、男の子や女の子を生んで、後顧の憂いが永久にないようにしたいと思っていたの。ところが数年経ったけれどまったくその気配もないし、大王はまたわたしだけにご執着、広く側室を求めようとな

これは文章家の血脈であり、黄子岸が言う通り、文章家が心得ておくべき糸引きの技法だ。つまり麝香の二字をここで出さず、後で持ち出したら味わいが無くなるのだ。

20 浙江省の宜興・羅解両山の間に産する銘茶の名。袁宏道の「龍井」に、「芥茶は葉粗大にして、真者は毎斤二千餘錢に至る。余これを覓むること數年なるも、僅かに數兩許を得たるのみ」とある。

21 手を出して来たら 原文は「動手動脚」。「水滸傳」八十一回の燕青が李師師に会う場面に、次のような用例がある。「燕青恐怕他動手動脚、難以廻避、心生一計」（燕青は彼女に手を出されてのっぴきならぬところに追い詰められてはと案じ、ある計略を思いついた）。

さいません。今大王は鬢も真っ白、えらくよぼよぼされて。あたしは愚か者だけど、大王さまが、生きては子無しの人となり、死しては跡継ぎ無しの亡者になるのが心配です。この蘋香という腰元は、水もしたたる天賦の麗姿、人に纏わりつくような霞の眼差し、あたし何度か言葉をかけて試してみたけど、なかなか面白みのある子よ。今晚大王の伽をしてもらいましょう」

項羽は真っ青になり、

「美人、昼間びっくりしたんで気が動転したな。なぜあんなに嫉妬深いお前が、とんでもなく鷹揚なことを言い出すんだ？」

悟空は愛想笑いをして、

「大王さま、あたしがふだんあなたに厳しいのは、あなた自身のためです。今日あなたに優しいのは、あなたの子孫のためです。わたし動転なんかしてないわ、大王さまがこれから先動転さえなさらなければ」

「お前がたとえ一万遍言ったところで、わしは蘋香なんぞいらん。まさか五年前正月十五日灯籠見物の夜の、^{ども}同に生き同に死のうという誓い²²を忘れ、わしをからかうつもりじゃあるまいな」

悟空は形勢不利と見て、また愛想笑いをして、

「大王、大王があたしを捨てるのだけが心配なのに、まさかあたしが大王を捨てるだなんて。ただここでまたお気に触りそうな事²³がひとつあるの」

（評）孫悟空は本物の虞美人でなく、虞美人もまた本物の虞美人でない。ニセの虞美人がニセの虞美人を殺したといってもよいのだ。

22 まさか五年前正月十五日灯籠見物の夜の 同に生き同に死のうという誓いを忘れ 白居易の「長恨歌」の「七月七日 長生殿、夜半人無くして私語する時。天に在りては願わくは比翼の鳥と作り、地に在りては願わくは連理の枝と爲らん。天長く地久しくとも時の盡きる有るも、此の恨み縣懸として絶ゆる期無からん」という玄宗・楊貴妃の誓いを念頭に置いているのだろう。

23 お気に触りそうな事 原文は「干瀆」。韓愈「兵部李侍郎に上る書」に、「尊嚴を干瀆（瀆）し、伏して惶恐を増す。」という例がある。

第七回

秦楚の際 四声たいこの鼓

真贋の美人 一鏡の中

項羽はすぐに、「美人、いったい何だい？」

と尋ねた。

「あたしは昼間あのサルに心臓がでんぐり返る思いをさせられたので、大王どうか先に合歎紋様のカーテンの中にお入りになって。あたしはしばらく寝椅子で一休み、それからお茶を一口頂いて、胸騒ぎが収まってからベッドに入りますわ」

項羽はすぐに悟空を抱きしめ、

「おれが美人をほったらかしにして、一人寝する道理があるものか。美人が一刻の間ベッドに入らねば、一刻の間寝ず、一晩中ベッドに入らねば、一晩中寝ないでおこう」

その時項羽はまた悟空に向かい、

「美人、おれは今晚ちょっと飲みすぎたので、五臓にでっかい鬱憤の塊¹ができちゃった。ひとつ夜伽に講談を語ってやろう、それで一つ憂さ晴らし²といこう」

悟空は愛くるしい声で、「大王さま、怒らないで、ゆっくり話してちょうだいな」

項羽はそこで悲憤慷慨し、自分の生涯を話そうとした。片手で佩刀をグツと引き寄せ、左足を立てて語り始めたのだった。

「美人よ、美人よ、わしはもはやこれまでだ！ 項羽だって男でござる。歳は二十歳、本も読まず、剣術もやらず³、秦の始皇帝の馬鹿さかげんを

1 鬱憤の塊 原文は「硯礪」。もともとふぞろいに積まれた石を指した。何遜「劉諮議守風に和す詩」に、「蕭條として疾帆流れ、硯礪 波を衝きて白し」とある。後に胸中の鬱憤を比喻する言葉となった。用例は『中州集』卷六所収雷淵「洛陽にて裕之欽叔と同一賦す」詩に、「書生 奈んともせず興亡の恨み、斗酒 聊か澆ぐ硯礪の罌」がある。

2 憂さ晴らし 原文は「出氣」。『記』第八十九回に、「也罷、等我和你去、把那厮連玉華王子都擒來替你出氣」（まあよいわ、わしがおまえと一緒に行ってあいつらと玉華王子を一くりに捕まえてきて、おまえの憂さを晴らしてやろう）とある。

3 歳は二十歳、本も読まず、剣術もやらず このあたりは『史記』卷七項羽本紀の記述「項籍少き時、書を學ぶも成らず、去りて劍を學ぶもまた成らず」等に則っている。

矚目世界の
伏線を張っ
ている。

目にし⁴、若者八千人を従え⁵、七十二歳の范增⁶を連れて、一心不乱に秦の始皇帝の後俊⁷に坐ろうと考えた。その頃羽衣方士というのがあって、いささか天数⁸が読めた。おれは何度か人をやって尋ねさせたが、秦の命運はまだ尽きぬという。

美人、おまえはどう思う？ 秦の命運は尽きたか否か？ その後わしの威勢は盛んになり、意気は上がり、造化小児^{ぞうぶつし}だってわしをどうこうできなくなった。秦は滅びるべきでなかったのに滅び、楚は興るべきでなかったのに興った。わがはいはある日血の滴る宋義の首を軍門に吊るすと⁹、將軍どもは魂も消し飛び、口あんぐり、両足がたがた、その時項羽^{わがはい}はなんと痛快だったことか。

秦の將軍章邯¹⁰が挑戦して来たので、わがはいが応戦した。その折、秦軍の勢いはなお盛んで、馬前に一人の將校が飛び出した。

わしはどなった、「貴様は何と申す！」

その將校はわしの真っ黒い顔を見、割れ鐘のような声音を聞くや、ずってんどうと地響き立てて、銀色にきらめく白馬からころげ落ちた。その將校をわしは殺しはしなかった。

しばらくすると、また一人の將軍が登場、ひらひらはためく紅旗には「大將軍黃章」¹¹とはっきり書かれている。秦もここまで追い詰められて

-
- 4 秦の始皇帝を項羽が目撃したことについては、『史記』卷七項羽本紀に「秦始皇帝會稽に遊び、浙江を渡り、梁は籍と俱に觀る。籍曰く、彼取りて代わるべきなり」とある。
- 5 若者八千人を従え 『史記』卷七項羽本紀最後の部分に、「且つ籍は江東の子弟八千人と江を渡りて西す」とあるのに基づく。
- 6 范增は項羽の參謀。『史記』卷七項羽本紀には「居鄆の人名范增、年は七十」とあり、微妙にずれている。
- 7 原文は「替身」。身代わりというほどの意味。近世では他人に買われて災いを引き受ける人の意味で使われることが多い。ここでは項羽が江南を巡幸する始皇帝を遠くから眺めた時に、「彼取って代わるべし」と言ったのに基づく。注4参照。
- 8 用例としては『三國志演義』第八十一回、張飛が戦死し、大軍を率いて仇を討とうとする劉備が仙人の李意に戦いの吉凶を尋ねたところ、「此れ乃ち天數にして老夫の知る所に非ざるなり」と答えた例がある。
- 9 『史記』卷七項羽本紀に、反秦勢力の盟主であった宋義を項羽が殺す場面が出てくる。「項羽は晨に上將軍宋義に朝い、即ち其の帳中にて、宋義の頭を斬り、出でて軍中に令して曰く、宋義は齊と楚に反するを謀る。楚王陰かに羽をしてこれを誅せしむと。是の時に當りて諸將皆懼服し、敢えて枝梧するもの莫し」
- 10 秦の名将、いったん項羽に降伏し、雍王となったが、後に高祖と戦い戦死した。
- 11 黃章 『史記』には黃章なる人物は登場しない。劉本には「大秦將軍章」とあり、直後に「秦もここまで追い詰められては「大」でもあるまいと考えたら」とあるので、続き具合はこちらの方がよろしい。そうだとするとその將軍は章邯ということになる。

は「大」でもあるまいと考えたら、戦闘の最中に突然「ワッハッハ」と笑いがこみ上げてきた。なんとその將軍はわがはいの笑う顔を見るや、骨がぐにゃぐにゃに砕け、槍を横抱きにし、馬上で身をかがめ、司令旗をめちやくちやに振り廻し、青金色の銅鑼を叩きつづける。と見れば、金色の將軍が自軍と見定めた陣営に逃げ込んでいくではないか。

その時わがはいは、秦の軍營の側で、烈火の如く怒り¹²、章邯めを罵った。

「秦国の下級將校¹³よ、貴様は自分で出馬する勇氣もなく、身の丈三、四寸の小童^{こわっぼ}に棒切れ持たせ、わがはいの刀の錆びにしようとしくさる」

わがはいの宝刀がほざきよった、「あんな小童の血は吸いたくない、章邯の血が吸いたいやい」

そこでわしは宝刀の言い分を聞き入れ、小童を逃がしてやったんだ。美人、章邯はどうしたと思う？日暮れ時、章邯めは万人の精銳を率いて、口も開かず、一言もしゃべらず、山をも切り開こうかという玉の柄つけた大まさかりを引っ提げ、わがはいの頭めがけて斬り下げてきた。わがはいは全身カッと熱くなり、宝刀の鯉口もカツカツと鳴り響いた。侍臣に高三楚¹⁴という普段からの剛情者¹⁵がいて、こう言上した、

「章邯を殺してはなりません。投降させましょう。我が陣中には炊事兵¹⁶が不足しておりますので、その役目を章邯にくれてやりましょう」

わがはいは、その時高三楚の言い分を聞き入れて、刀の切っ先で軽く一薙ぎ、やつに乗る目にも彩なるぶちの龍馬を斬り捨て、やつを逃がしてやった。その時章邯は肝を冷やしただろうて」

12 烈火の如く怒り 原文は「發起火性」。「火性」の用例は、『記』第四十二回に、「(孫悟空)道、「這菩薩火性不退、好是老孫說的話、壞了其他的德行、就把淨瓶擡了。…」(悟空は言った、「この菩薩は相変わらず怒りっぱい、俺の言い方が悪かったので、腹にすえかね、淨瓶を投げたんだろう…)」とある。

13 下級將校 原文は「小將」。この語の用例としては、『三國志』卷五十五呉書丁奉伝の「少くして驍勇を以って小將となり、甘寧・陸遜・潘璋らに屬す」がある。

14 史書には未見、おそらく童説の創作であろう。

15 剛情者 原文は「志氣」。『清平山堂話本』の「快嘴李翠蓮記」に、「翠蓮道、「爹休嚷、娘休嚷、哥哥嫂嫂也休嚷。奴奴不是自誇獎、從小生來志氣廣。」(父さん母さんさわぐでない、兄さん義姉さんさわぐでない、自慢じゃないがこの私、生まれついでこの剛情者)」

16 原文は「燒火軍士」。「燒火」は炊事すること。明の何良俊『四友齋叢説』卷十五史十一に、「(王振の家の厨下に一の燒火老僕あり、素もと淳謹にして振は頗るこれを信聽す」とある。

悟空は小声で息を整えながら、
「大王、まあお茶を一杯召し上がって、それからゆるゆると語って下さいね」

項羽はやっと口を閉じた。すると望楼の上でドン・ドンと太鼓が鳴り響き、もう二更ごじゅういちじになった。

「美人、眠たいかな？」

「気分はまだクサクサ」

「美人がまだ眠らないなら、わがはいが続けて語るのを聞いておれ。」

次の日の朝、わがはいが虎の記章のついたテントでグーグー寝ていると、聞こえてきたのは、南側で百万人が「万歳、万歳」と叫び、北側でも百万人が「万歳、万歳」と叫び、西側でも百万人が「万歳」と叫び、東側でも百万人が「万歳」と叫ぶ声。わがはいはすぐに起き上がり、当番兵に尋ねた、

「きつと秦の皇帝が自ら兵を率いてやって来て、わがはいと一戦交えようというんだな。やつだつて天子ではあるから、今日は新品の鎧に着替えようか」

美人、その当番兵がどう答えたと思う？その当番兵は幔幕のところに跪き、モゴモゴ口ごもりながら言った、

「大王、お間違えでございます。今になつてもまだ秦の字などを口にされるとは。八方の諸侯が大王の軍営の門前に推参して、口々に万歳を唱えております」

当番兵がそう言うのを聞き、わがはいは急いで髪を櫛でとかし、兜をかぶり、足を洗つて靴を履いたが、新しい鎧には着替えず、ただちに命令を下した、

「天下の諸侯に、みな軍門を入れて言い分を述べさせい」

己の時に命令を下し、午の時を知らせる牌に変わり、未の時の牌に変わつても、軍門の外にいるはずの諸侯たちは全く入つて来ようとしな

わがはいはいささか不思議に思い、すぐ当番兵を呼び、諸侯たちに尋ねさせた、

「わがはいに会いたいというのに、ただちに謁見しようとしな。逆にこっちから反対に貴様らに会いに来いと言うのか？」

わがはいの言葉がまだ終わらぬうちに、突然軍門が大きく開かれ、天

秦の皇帝に
会う時には
よろしい
新しい甲に
着替え、諸
侯に会う時
には着替え
ない。ちゃ
んと配慮し
ている。

またもや一
しきり奇想
を発してい
る。

不可思議、
不可思議。

下の諸侯たちが誰もかれも半分の背丈になってしまっていた¹⁷。わがはいはびっくりして真っ青になり、

「一群の英雄たちよ、なんで背丈が半分になったのだ？」

と内心考えた。

じっと観察すると、なんと連中は膝を足の裏¹⁸代わりにしてえっちらおっちら階段を上がって来よった。右側の幔幕の前にも、左側の幔幕の前にも、王侯の衣冠をつけた者が叩頭のうえ拜礼。なんでずっと入らせなかったか、とわがはいが怒鳴りつけようとした矢先、侍臣が上奏した、「大王、階下の諸侯は大王の命令を受け、幔幕の前で協議しました。かれらは胸を張って軍門に進み入る勇気も、拱手の礼をする勇気も、御前に推参する勇気も持ち合わせません。みんなで思案したものの、地面に這いつくばって身動きも出来ず、協議また協議、苦心また苦心、憂悶また憂悶、恐慌また恐慌、決まったのが膝行法、やっとのことで拜謁できることになりました」

侍臣の口を借りて諸侯が軍門で拝跪する様を描写するのは、項羽は本当に自慢話が上手だ。

わがはいはその話を聞いて、ちょっとばかり憐れになってきて、面を^{おもて}上げいと諸侯に命じた。その時誰が頭をちょいとでも上げられ、足をちょいとでも動かせたと思うかな。

項君の山をも引っこ抜き世の中をおおい尽くす気概と、美人のなよなよと哀しげな風情は、天地の間に欠かせぬ存在。

すると、地の底からズーンズーンと何かの音がしたが、鐘の音でもなく、太鼓の音でもなく、笛の音でもない。心を落ち着けて聞いてみると、なんと諸侯は顔を上げられないままに、万歳を唱えておったのだ。思い起こせば当時のわがはいは本当に痛快じゃった」

悟空はものさびしき階段に花びらが散る風情の声をだし、

「大王、お疲れさま。緑豆粥を召し上がって、ちょっとお休みになってからまたお語り下さいな」

項羽が口を閉じると、すぐに望楼の上からドン・ドン・ドンと太鼓の音が三回響いた。

「三更になりました」と悟空。

17 天下の諸侯たちが誰もかれも半分の背丈になってしまっていた このあたりの記述は、『史記』卷七項羽本紀「是に於いて已に秦軍を破り、項羽諸侯の將を召見す。轅門に入るに、膝行して前まざる無く、敢えて仰ぎ見る莫し」を勝手放題に敷衍したもの。

18 天下の諸侯たちが誰もかれも半分の背丈になってしまっていた このあたりの記述は、『史記』卷七項羽本紀「是に於いて已に秦軍を破り、項羽諸侯の將を召見す。轅門に入るに、膝行して前(す)まざる無く、敢えて仰ぎ見る莫し」を勝手放題に敷衍したもの。

項羽が言った、

「美人の煩悶はまだ消えておらん。わがはいが続けて語るのを聞いておれ。その後沛公劉邦がいささか勝手を働きよって、わがはいも少しばかりむしゃくしゃしたが、やつには構わず、ついに関中〔函谷関の内側で秦の根拠地〕に入った。

細密な描写。

子嬰が降ったのは、漢の高祖であって、項羽ではない。だが、これは項羽の自慢話なので、手柄の借用もやむなし。まして奥方の前では、無理もなかるう。

ふと見れば、十里のかなたに一人の人物、明らかに日月星辰のごとき珠玉を垂らした天子の冠¹⁹をかぶり、山・龍・水草・斧・黼黻の紋様の皇帝衣²⁰をまとい、わだかまる龍・鳳凰の羽に飾られた緑や青の色あざやかな皇帝車²¹に乗り、銀印・金印、紫・黄の印綬を帯びた側近の高官が数千人もつき従い、長蛇の列を作って、延々と近づいて来た。

そいつは松林の隙間からふとわがはいを見つけた。その時、先頭のそいつはあわてて日月星辰の冠をとって、庶民の麻布の帽子をかぶり、山・龍・水草・斧・黼黻の皇帝衣を脱ぎ捨て、ぞっとするほど青白くも青白い衣服に着替え、わだかまる龍・鳳凰の羽に飾られた緑や青の色あざやかな皇帝車から降りて、自分で両手を後ろにまわした²²。かの一群の銀印・金印、黄・紫の印綬を帯びた者たちも、みなみじめな縄帯に替え、顔を真っ赤に塗って平伏し、地中に何千尺何万尺も潜り込みたくてたまらない様子。

彼らが身なりをきちんと整えるうち、おれさまの烏駝²³は飛ぶように走り、あっという間に目の前に着いちまった。すると道端で、「万歳爺、

19 日月星辰のごとき珠玉を垂らした天子の冠 『後漢書』第三十輿服志下に、「冕は皆廣さは七寸、長さは尺二寸、前は圓く後ろは方く、朱緑の裏、玄い上、前垂は四寸、後垂は三寸、白玉の珠を係けて十二旒と爲し、其の綬の采色あるを以て組纒と爲す」とある。

20 山・龍・水草・斧・黼黻の紋様の皇帝衣 『書經』益稷に「予は古人の象を觀さんと欲す。日・月・星・辰・山・龍・華蟲は作會し、宗彝にす。藻・火・粉・米・黼黻は絺に繡す」とあり、その伝に、「藻は水草の文ある者。…黼は斧の形の者。黻は兩つの己相い背くを爲す」と言っている。

21 皇帝車 原文は「神寶車」。『後漢書』卷十上皇后紀序に、「而赴蹈不息、焦爛爲期、終于陵夷大運、淪亡神寶」（而して赴蹈して息まず、焦爛を期と爲し、終に大運を陵夷し、神寶を淪亡す）とあり、李賢注に、「神寶は帝位なり」とある。故に「神寶車」は皇帝の車駕とわかる。

22 秦王子嬰（始皇帝の孫で二世皇帝胡亥が趙高に逼られて自殺した後に秦王となった）が降伏したのは高祖であって、項羽ではない。その時の様子は『史記』卷六秦始皇本紀に、「子嬰秦王と爲りて四十六日、楚將沛公秦軍を破りて武關に入り、遂りて霸王に軍す。人をして約して子嬰を降さしむ。子嬰は即ち頸に係くるに組を以てし、白馬素車にて、天子の璽符を奉じ、軹道の旁らに降る」とある。

23 項羽の愛馬駝。『史記』卷七項羽本紀に、「（項羽の）駿馬駝、常にこれに騎す」とある。

万歳爺」と呼ぶのが聞こえる。わがはいが横目で見ると、そいつはまた、
 「万歳爺こうていへいか、万歳爺、わたくしめは秦王の子嬰、万歳爺に投降いたす者で
 ございます」と言う。

わがはいはその当時痲癩もちで、あつと言う間に手が動き、たった一
 太刀でバッサリ斬り捨て君でも臣でも、大人も子どもも、数千人を皆首
 なし死体にしてしまった²⁴。当時のわがはいはなんと痛快じゃった。

なかなか一
 件落着とは
 いかない。

そこで叫んだ、

「秦の始皇帝の幽魂よ、おまえは今日のこの事態を予想していたか！」

さて悟空が一心に探索していたのは秦の始皇帝のため、突然項羽がそ
 の三文字を口にしたので、わざと追求をゆるめて、

「大王、お話をやめて、わたし眠たいわ」

時報の太鼓
 の描写は入
 神の出来映
 え。

項羽は虞美人が眠たいというのを聞いて、どうして従わずにいられよ
 う、すぐに口を閉ざすと、望楼の上からドン・ドン・ドン・ドン・ドン
 と太鼓の音が五回聞こえた。

「大王、この一段はずいぶん長くしゃべられたのね、気がつかぬまま
 四更ごぜんさんじをとばしちゃいました」

『西遊補』
 は、講談で
 ある。項羽
 の講談はま
 さに講談の
 中の講談
 だ。

悟空はそこで寝台に寝転び、項羽も横になって、同じ枕で眠った。悟
 空はまた項羽に向かって、

「大王、あたしほんとに寝付けないの」

「美人が眠れないなら、わがはいがもっと講談を聞かせてやろう」

「講談は語ってちょうだい、でも無顔話はじらざるはなし²⁵はもうやめて」

「無顔話はじらざるはなしってなんだ」

「他人のことを話すのを有顔話はじをしるはなし、自分のことを話すのを無顔話はじらざるはなしと言いま
 す。ねえ、秦の始皇帝は今どこに？」

肝心なとこ
 ろ。

「ああ、秦の始皇帝だって男一匹、だが問題が一つ。他の男は賢いのに、
 やつはアホなんだ」

「始皇帝は六つの国を併合し、長城を築いた、やっぱり知恵者でしょう」

24 項羽は直接手を下して子嬰を殺したわけではないが、項羽が函谷関に入り、一月余りたつと、「子
 嬰及び秦の諸公子宗族を殺し、遂りて咸陽を屠り、其の宮室を焼き、其の子女を虜にし、其の珍
 寶貨財を収め、諸公共にこれを分かつ」（『史記』卷六秦始皇本紀）とあるので、「君でも臣でも、
 大人も子どもも、数千人を皆首なし死体にしてしまった」というのも、あながち誇張ではあるまい。

25 無顔話 「無顔」の用例としては『驚世通言』第十五卷「金令史美婢酬秀童」の「周道士自覺無顔、
 不敢分辨」（周道士は面子が立たなくなり、弁解もできませんでした）がある。

「美人、人は智愚と愚智²⁶を弁別しなくてはならん。秦の始皇帝の智は愚かな智というもの、元始天尊²⁷はやつがひどく間抜けなのを見て、古人世界に置いとけないと判断し、すぐに矇矓世界へ送り込んでしまった」

悟空は「矇矓世界」の四字を耳にしたが、またさらに何が何だかわからなくなり、慌てて、

「矇矓世界までどのくらい距離があるの？」

「間にまだもう一つ未来世界があるぞ」

「矇矓世界が未来世界のもう一つ先ならば、秦の始皇帝が矇矓世界²⁸に居るなんて誰がわかるの？」

「美人、おまえは知らんだろうが、実は魚霧村に二枚扉の玉門²⁹があって、そこから未来世界へ通じる抜け道が一本隠されておる。未来世界の中にもまた矇矓世界へ通じる道³⁰が一本ある。先年、名は新在、号を新居士という人物が、大胆にも玉門を押し開け、なんと矇矓世界へ父を探しに行行って帰って来たが、その時には髭も髪も真っ白になった。その新居士はその一度きりにして、そもそも二度いくべきじゃなかった。ところがじっとしておられず、三年間鳴りを潜めた後、また玉門を出て、岳父を探しに行こうとした。その時大禹玄帝はひどく腹を立て、彼の帰りを待たずに、一枚の封印紙³¹で玉門関を封印させてしまわれた。

新居士は矇矓世界から出て来て、玉門関がピッタリ閉まっているのを見て、一日中叫び続けたが、誰一人として返事をせず、あっちへうろう

新居士の一段、文章の境地はなんとも廣大無辺だ。

26 ここでは「愚に似て智な人、智に似て愚な人」の意。普通「愚智」は「愚者と智者」を意味する（『莊子』在宥篇に、「是に於いて喜怒相い疑い、愚知相い詐むき、善否相い非り、誕信相い譏り、天下は衰えたり」とある）が、ここは特殊な用法である。

27 道教の最高神で三清の一人。『隋書』經籍志四に、「道經者、云う元始天尊有り、太元の先に生まれ、自然の氣を稟け、沖虚凝遠にして、其の極を知る莫し」とある。

28 「あほう」を意味する矇矓は、『陳亮集』卷二十八「又甲辰 朱元晦に答うるの書」に、「亮は不肖なりと雖も、然れども口は説き得、手は去き得たり。本より眉を閉じ、目を合わせ、矇矓たる精神にして、以て自ら道學者に附する者に非ざるなり」と用いられている。

29 すぐ後に「玉門關」とあるので、単なる玉で装飾した門を指すということはなからう。未来世界・矇矓世界への入り口という意味で、漢の武帝によって甘肅省敦煌に置かれた異界西域への入り口、玉門關を引き合いに出したのであろう。

30 原文は「伏道」。暗渠や秘密の抜け道を指す。『水經注』卷十三灤水に、「灤水は又東のかた燕王陵の南を逕。陵に伏道有り、西北のかた薊城中に出ず」とある。

31 封印紙 原文は「封皮」。「封皮」の用例としては、『醒世恒言』第十五卷「赫大卿遺恨鴛鴦」の「又發兩張封皮將菴門封鎖不題」（さらに二枚の封じ紙で非空庵の扉を封印したことは言うまでもありません）がある。

ろ、こっちへうろうろ、こんな目に会ったら人はつらくてしょうがないだろうが、幸せなことにこの新居士は性根が坐った人物、未来世界に住んで十数年、いまになってもまだ家に帰って来ない」

悟空はそこで口をはさみ、

「大王、玉門が本当に見ものなのか、明日ちょっと見に行きたいわ」

「それは何でもない、ここから魚霧村まではほんのひと歩きだ」

しゃべっている間に、鶏が三度時を告げるのが聞こえ、緑の紗のかかった八枚の窓が魚の肚はらのような白色に変わり、徐々に太陽が東の山に昇って来て、朝日の光がキラキラおどっている。輿入れについてきた侍女³²が四人、窓の外で立ち働いていたが、足音はしても話し声は立てない。

悟空はそこで、「蕪香、あたし起きるわ」と声をかけると、侍女が窓の外から、「はいたいま」と答える。

ただちに蕪香が扉を開けて入って来て、項羽は悟空をささえていっしょに歩き出した。と、そこへ侍女が小走りにやって来て、「お妃さま、どうぞ天歌舎でお色直し³³を」申し上げた。

悟空はすぐに歩き出そうとしたが、ひょいと思い直し、もしすっぴんじゃ風流な美人も台無し、というわけで、緑の紗の窓をそうっと押し開き、ザクロの花びらを一枚摘み取り、手のひらにのせ弄んだ後、もと通り花散る階段のあたりに捨てた。

悟空はくりと向き直り部屋を出て、ほどなく天歌舎に到着。ふと見ると、ピカピカに磨き立てた³⁴書きもの机の上に、漆がけの銀色の箱が一つ配置され、中には嫦娥の住む月宮殿³⁵の貴重な香粉の入った銀の香合が一つ。その横に碧琉璃の小皿が並び、上には桃波まっかな臙脂べにを入れた

32 原文は「贈嫁」。『禪真後史』第九回に、「今日弟媳は惟だ人物が艶麗なるのみならず、又且つ贈嫁も千金なり」とある。

33 原文は「梳洗」。櫛で髪をとかし、顔を洗う意味であるが、転じて化粧をも意味する。白居易「夢遊春詩に和す一百韻」詩に、「風流 梳洗かみを薄うすんじ、時世 装束めくを寛ゆるうす」とある。

34 ピカピカに磨き立てた 原文は「水磨」。『水滸傳』第五十五回で、呼延灼のいでたちを描写したところに、「騎一疋御賜踢雪烏騾、使兩條水磨八稜鋼鞭、左手的重十二斤右手重十三斤」（一匹の恩賜の踢雪烏騾の黒馬にまたがり、二本の磨き立てた八角の鋼鉄製の鞭を使う。左手は重さ十二斤、右手は重さ十三斤である）という用例がある。

35 嫦娥の住む月宮殿 原文は「月殿」。梁簡文帝「玄圃園講頌」の序に、「風は月殿に生じ、日は槐煙を照らす」とある。

銀の小箱が一つ。左側に紫色の紋様の盃が並び、その中にはちまき用の布³⁶が一本。さらに細めの壺が一つ、青い眉墨が満たされている。

東側に大きな油梳³⁷が一枚、小さな油梳が三枚並び、西側に青玉の油梳が一组並び、次に青玉の油梳が五枚、小さな青玉の油梳が五枚。西南に大きな紋犀³⁸の油梳が四枚、小さな赤石³⁹の櫛が四枚。

東北に氷裂紋の細かい玉瓶が並び、百に香ぐわしい蜜水が置かれ、さらに百乳のある銅の雲紋の酒壺が一つ、酒壺の中に潤指甲爪用の戴漿[自注：酒漿]が入っている。

西北には方空玉印⁴⁰の紋様の石の盆が配置され、盆の中に清水、水の中に珍石がいくつか、石の上に竹の柄つきの小さな棕櫚のブラシが一本置いてある。

南には軟らかな黒ブラシが四本、軟らかな小型の黒ブラシが十本、人毛製の軟らかなブラシが六本、その側に水油半面梳が一枚、牙芳梳⁴¹が二枚置かれている。

さらに金の鉗子が一丁、玉を散りばめた剪刀が一丁、潔面刀が一丁、清冽なバラ水⁴²が一皿、手洗いの緑豆粉⁴³が盃一杯、緑玉の香油が一皿、すべて一枚の青銅古鏡のあたりに配置されている。

36 ちまき用の布 原文は「纏頭」。清初の随筆集『閱世編』巻八内装に、「今世称する所の包頭、意は即ち古の纏頭なり。古或いは錦を以てこれを爲る。前朝〔明〕にては冬には烏綾を用い、夏には烏紗を用う」とある。

37 油梳 髪油をつける時の櫛。

38 紋犀 紋様入りのサイの角。

39 赤石 風化岩石の一種、細かく碎き壁を塗ったり、煉丹の材料として使ったりする。

40 方空玉印 方形の穴がある玉の印か、未詳。

41 牙芳梳 美しい象牙の櫛か、未詳。

42 バラ水 原文は「薔薇露」。バラの香水で、「薔薇水」ともいう。宋の蔡條の『鐵園山叢談』巻五に、「舊く薔薇水は乃ち外國の薔薇花上の露水を採ると説くは殆ど然らず。實は白金を用いて甌と爲し、薔薇花を採りて氣を蒸して水と成し、則ち屢ば採りて屢ば蒸し、積みて香と爲す、此れ敗らざる所以なり。但だ異域の薔薇の花氣は馨烈しきこと非常なり。故に大食國の薔薇水は琉璃缶中に貯え、蠟もて其の外を密封すると雖も、然れども香りは猶お透徹し、聞ること數十歩、人の衣袂に灑ぐに、十數日を経て歇まざるなり。五羊の外國に効いて香を造るに至りては、則ち薔薇を得ること能わず。第だ素馨の茉莉花を取りてこれを爲り、亦た人の鼻觀を襲うに足るも、但だ大食國の眞の薔薇水を見るに、猶お奴のごときのみ」とある。

43 緑豆粉 原文は「菘米粉」。おそらく手洗い用の緑豆粉であろう。『紅樓夢』第三十八回に、「又命小丫頭們去取菊花葉兒桂花蕊熏的綠豆面子、預備着洗手」（また侍女たちに命じて菊の葉と金木犀の芯でよい香りをつけた緑豆粉を取って来させ、手洗いの準備をさせます）とある。また古くは『世説新語』紙漏篇にも、王敦が厠で手洗い用の緑豆粉を食べた話がある。

鏡の中の
鏡。

悟空は鏡を前にしてあわててのぞきこみ、本物の美人と比べてどうかと見てみると、鏡の中の自分はさらに美しさが増していた。と、その時侍女たちが現われ悟空を取り巻き、髪を結う者は髪を結び、着替えの者は着替えをさせた。

朝化粧が終わったとたん、またもや項羽が飛び込んで来て、大声で、「美人や、玉門へ行くぞ」とわめき、悟空は大喜び。

項羽が輿を用意させると、悟空は言った、
「大王、なんて気が利かない⁴⁴、ほんのひと歩きの道で、松や柏の並木道なのに、まったく無粋よ、輿なんかに乗ってくなくて」
「輿はやめだ！」

二人は手に手を取って出かけ、まもなく玉門関の前に着くと、二枚の扉には何の封印も張られておらず、ちょっと押すと扉は半開きになった。

悟空は「今行かなきゃいつまで待つか」と思い、ひらりと身を翻し、玉門関に走り込んだ。項羽は大慌て、ああああ・ううううと言うばかり、悟空の衣服をつかもうとしては、また空をつかみ、ずっでんどうとひっくり返った。悟空は全く振り返らず、ただひたすら突き進んだのだった。

さて、悟空が玉門に突入してみると、なんと真逆さまに転げ落ちた。転げ落ちること数里、耳にはずうっと項羽の泣き声や侍女の叫び声が聞こえていたのだったが、さらに数里落ちて行ってやっと聞こえなくなった。しかし未来世界へは全然到達できなかったのである。

悟空はあせて、
「アリヤリヤアリヤリヤ、おれさまはこれまでずっと人を謀^{たばか}って来たのに、今度は反対に謀^{そこなしど}られて無量井に落とし込まれたぞ！」とわめいた。

すると耳元で、「大聖、心配ありません⁴⁵、この辺りで道程はほぼおしまい、あとちょっとで未来世界です」と叫ぶのが聞こえて来た。悟空は言った、

「兄貴、お前さんどこでしゃべってるんだ」

44 なんて気が利かない 原文は「不知趣」。用例としては『記』第九十三回に、「八戒道、「你這黒子不知趣。丑自丑、還有些風味…」」（八戒は言った、「この黒んほはなんて気の利かぬことを。醜男には醜男の味ってものがあるんだ…」）」

45 心配ありません 原文は「不用憂煎」。『水滸傳』第六十五回に、「張順心中憂煎、那裏睡得着」（張順は内心心配でいららしており、どうして眠れましょう）という用例がある。

その男は、「大聖、わたしはあんたのお隣にいます」と言った。

「そんなら、戸口を開けて家に入れ、お茶を一杯飲ませてくれ」

「ここは無人世界、飲ませる茶なんかありません」

「無人だったら無人と言ってるのはどいつだ？」

「大聖はととても賢いのに今日はなんともアホなことを！わたしは人の
数^{かず}⁴⁶に入っていないし、これまで人の数^{かず}に入ったこともありません」

まずいぞ！
また別の世
界だ。

悟空は戸口が開かないのを見て、むかつ腹を立て、うんと力を入れて
ころがると、まっすぐ未来世界へと落下して行った。やっと地上に降り
立ち少し歩き出すと、あの時の六人の盗賊⁴⁷に真正面からぶつかった。
悟空は笑いながら、

「チェッ、めぐり合わせが悪いや、まっ昼間から亡者とは」

六人の盗賊は悟空を怒鳴りつけた、

「きれいな姐さん逃げるな！身の代に身ぐるみ脱いで、お宝置いてきゃ
通してやる」

（評）なんともはや、一篇の項羽本紀だ。

46 人の数^{かず} 原文は「身数」。見慣れぬ語であるが、『敦煌變文集』第二編に収められている「廬山遠公話」に、匪賊白莊が奴隸となっていた惠遠（慧遠）に言った言葉、「我今身数不少、手力極多、却放你歸山、任意修行」（我が家は人手は少なくないし、奴隸もとても多い、そこでお前を廬山に帰し、好きに修行させてやろう）がある。「手力」（奴隸）に対する「身数」であるから、これは自由身分の「人」の意味であろう。

47 六人の盗賊 原文は「六賊」。『記』十四回、三蔵・悟空一行を襲った追い剥ぎの一行をもって来たもの。おそらく煩惱を引き起こす原因となる六つの要素（色・声・香・味・触・法）を踏まえている。

第八回

一たび未来に入り 六賊を除き

半日閻羅となり 正邪を決す

実は、悟空が美人になっていた時、あわてて玉門に突入し、未来世界がどんな具合かばかりが気になっていたの、これまで正体を現わさなかったのだ。その折に六人の盗賊の声が聞こえてきたので、ハッと我に返り¹、急いで顔を一撫で、

「盗賊め、棒を喰らえ！」

とわめいた。盗賊たちは恐怖で肝っ玉が縮み上がり、路上に跪き、哀れっぽく言上、

「大聖慈悲菩薩さま、あつしたちは昔藤の古木の下で不埒にもあなたのお師匠様の道をさえぎり、大聖さまの御心をかき乱し、兄弟六人同時に非業の死を遂げました。その時靈魂だけが古人世界へ駆け込みましたが、古人世界では盗賊の悪名のおかげで受け入れてもらえず、止むを得ずここに仮住まい、正々堂々の追い剥ぎ稼業、決して悪事をはたらいてはおりません。何とぞ大聖、命ばかりはお助けを²」

「おれがてめえらを見逃してやろうとしても、てめえらの方でおれに見逃させねえんだ」

例の話を持ち出して来た。

そう言うやいなや、悟空は棒を取り出し、連中を叩きつぶし、^{ミートパイ}肉餅にしまい、先へ先へと進んで、ひたすら矇矓世界への間道をさがすつもりであった。

突然二人組の青衣の童子³が悟空をしっかりとつかまえ、

1 ハッと我に返り 原文は「猛省」。「猛醒」に同じ。迷いからはっと覚めること。『警世通言』卷三十六に、趙再理という知県の偽物が出現し、開封尹が真偽を決めかねていた時、「大尹再三不決、猛省思量、有告簡文憑是真的」（開封尹はどうしても決めかねていましたが、ハッと我に返り考えました、任命状を持っているのが本物だ）

2 命ばかりはお助けを 原文は「放生」。普通は捕らえた魚鳥を放して善行を積む行為を指すが、転じて人の命を助けたり助命したりすることを指すようになった。馮夢龍の『東周列國志』七十二回に、「越（蘆越）飛馳出關、遙望之曰、「是矣。」喝令左右一齊下手、將訥（皇甫訥）擁入關上。訥詐爲不知其故、但乞放生。」（蘆越は急いで昭關を出て、遠くから彼を見て「こいつだ！」と言った。まわりの者に命じて捕まえさせ、皇甫訥を關に連行させた。皇甫訥は何も知らぬふりをして、ひたすら命乞いをした）とあるのがその例である。

3 青衣の童子 「青衣」は役所の下役が着る黒服。ここでは閻魔王の手先を勤める子供を指す。『記』第十回で太宗が冥府に赴く場面にも、「二人正説間、只見那邊有一對青衣童子、執幢幡寶蓋、高叫道、「閻王有請、有請。」（二人が話していると、むこうから二人の青衣の童子が旗と宝蓋を高く掲げてやって来て、大声で「閻魔王がお呼びです、お呼びです」と叫んだ）のように出てくる。

「大聖さま、ほんとにほんとによい所へ。うちのエンマ大王が病気でなくなっただのに、天帝はなにやら建築工事を始めて忙しく、新任者の名前を送ってくるひまもなく、ついに冥府に主がいなくなってもおかまいなし。今日大聖さまが私らのために半日でも面倒を見て下されば、感謝感激雨あられです」

悟空は考えた、

例の話を持ち出して来た。

「もしまた半日無駄にしたら、明日やっとこさ始皇帝にご対面ということになってしまう。もし万が一お師匠様が妖怪に殺されたら、どうする。ガキどもにお帰り願った方がいい」

そこで大声張り上げて、

自己描写はまさに追真的。だがこのように短兵急な性格であればこそ、手加減なしに秦檜を尋問できるのだ。

「坊や、おれは他のことならやれるが、エンマ大王だけは絶対やれない。おれは正直者だが、すぐに頭に血が上るたちで、何度も人を傷つけてる。万一冥府に訴状⁴が来て、原告の言い分が正しければ、おれはあつという間に腹を立て、棒を取り出して、被告が粉々になるまでぶっ叩く。もし公正で確かな証人⁵が出てこなきゃいいが、その場に証人が現われ、まっすぐ進み出て跪き、「原告が悪い、被告がかわいそうです」と言ったら、おれはどうすりゃいいんだ」

初めっから何一つまちがっていない。孫悟空がどうして本物の閻魔大王たりえよう。こうして人を巻き込もうとしているのだ。

「大聖さま、あなたはまちがっておられます。殺すも生かすもあなた次第、また誰を恐れておられます？」

と青衣は言い、悟空が承知しようがしまいがおかまいなしにさっと鬼門関⁶に引っ張り込み、声高に、

「各員お出迎えを、正真正銘のエンマ大王を探し出して参りましたぞ」

悟空はどうすることも出来ず、止むを得ず正殿に上がった。その時、

4 原文は「狀詞」。「狀子」とも言い、告訴状のこと。『初刻拍案驚奇』巻十に、「(陳大郎) 就在崇明縣進了狀詞、又到蘇州府進了狀詞。」(陳大郎は崇明縣に告訴状を上呈し、さらに蘇州府に行つて告訴状を上呈した) とある。

5 証人 原文は「中證」。『初刻拍案驚奇』巻十に、「那趙孝是台州人、分明是你們要尋箇中證、急切裏再沒有第三箇徽州人可央、故此買他出來的。」(あの趙孝は台州人だ。証人を探していたお前たちが、急には三番目の徽州人を頼めなかったために、金でやつを買取して来たんだろう) とある。

6 鬼門関 『記』第十回に、「太宗遂與崔判官并二童子舉步前進。忽見一座城、城門上掛着一面大牌、上写着「幽冥地府鬼門関」七箇大金字」(太宗は崔判官と二人の童子とともに進んで行った。すると城が現われ、城門には「幽冥地府鬼門関」という七つの金文字が書かれていた) とあり、冥府の門を指す。

大王の隨身判官⁷の徐顕が現われ、玉璽を捧げ、悟空に管掌を要請した。階下には赤髪の鬼卒、青牙の鬼卒、無縁仏のうろろん亡者の群れ、しめて八千万四千六百。殿前には、七尺判官^{いれずみ}、花身判官、総巡判官、掌命判官、本日判官、本月判官、芙蓉判官、水判官、鉄面判官、白面判官、緩生判官^{えんめい}、急死判官^{いのちをちぢめる}、照姦判官^{あくにんをてらす}、助正判官^{せいぎをたすける}、女判官などなど、五百万と十六人、連名の自己紹介状⁸を奉呈し、口々に「千歳」⁹と唱える。また、他の九殿の王¹⁰が謁見に参上、悟空は一人一人を目通りさせて引き取らせた。

黄魯直〔宋代の文学者黄庭堅〕が「閻羅天子の図」で、天子の姓は火と述べたが、やはり心の事を言っているのだ。

その時文書係の曹判使が階下に跪き、生者死者の台帳を差し上げた。悟空はそれを受け取り、ひっくり返すうちにこう思った、

「おれはおととい男や女を何人か打ち殺したが、台帳には記載されているだろうか？」

ずっと気にしていたのだ。

また一枚めくって思うに、
「万一「孫悟空若干名を打ち殺せり」と記載されていたら、今さしあたってじっと我慢するのがいいか、命令書¹¹を出してもみ消すのがいいのか」

あれこれ思い悩むうちに、ハッと気がついた、
「チェッ、おれさまが昔ここへ乱入した時、孫という名字をほとんど名簿から抹殺してしまい、小ザルたちもおれのおかげで功罪ともにチャラということになった〔『記』三回〕。ましておれさま本人のことなんぞ、

7 判官は生死簿を管理する地獄の役人。注6の崔判官もその一人。

8 自己紹介状 原文は「手本」。明清時代に上司や恩師などに面会を請う際に自分の姓名・官位を書きつけた自己紹介状を指した。『古今小説』第二十九卷「月明和尚度柳翠」に、「柳府尹遂將参見人員花名手本、逐一點過不缺。止有城南水月寺竹林峯住持玉通禪師、乃四川人氏、點不到。」（柳府尹はそこで謁見に訪れた人たちの自己紹介状を逐一点検しましたが、誰も欠けていませんでした。ただ一人、城南水月寺の住職玉通禪師、四川の人、というのが、点呼してもその場におりませんでした）とある。

9 皇帝に対しては「万歳」、皇太后・親王に対しては「千歳」と呼びかける習慣があり、閻羅王は皇太后・親王に準じて「千歳」と呼びかけられている。

10 他の九殿の王 冥界には十人の王がいるとされる。一秦漢王、二初江王、三宋帝王、四伍官王、五閻羅王、六變成王、七泰山府君、八平等王、九都市王、十轉輪王である。（『織田佛教辭典』九百六十頁参照）

11 命令書 原文は「牌票」。上級官吏が出す命令書。時代は下るが、『儒林外史』第四回に、「現今奉旨禁宰耕牛、上司行來牌票甚緊、衙門裏都也莫得喫。」（今皇帝の命令で、農耕牛の屠殺を禁止していて、上の方からも命令書できびしく言ってきており、役所の中では食べられません）とある。

どのチンピラ鬼卒が報告出来て、どの糞ッ垂れ判官が記録できるもんかい」

と言って、パラパラめくり、ついで階下に放り投げた。曹判使はもとの通り拾い上げて両手で捧げ、左側の柱の側に立っていた。

悟空はそこで曹判使に命令、

「暇つぶしだ、小話本を一冊持って来い」

「殿下、ここはとても忙しく、小話本を読む暇はございません」

着眼点。

と判使はお答えし、一冊の黄面暦¹²を奉呈、さらに、

「殿下、前任の殿下はみなさん暦の本をご覧になってました」

と言上した。

悟空が開けてみると、あれ、初め¹³が十二月、逆に正月がおしまいに来ているのだ。毎月の初めが三十日、もしくは二十九日、またもや一日がおしまいに来ている。びっくりした悟空、

「まさか！未来世界の暦はみんな逆さまだ。まったくわけがわからない」

暦を作った人をつかまえて尋ねようとしていたその時、一人の判官が堂に参上し、

「殿下、今日の夕方のお裁きは、宋の宰相秦檜¹⁴尋問の一件でございます」

悟空は、「秦檜とやらはまちがいに悪人だ。やつが慈悲深い坊さんみたいなおれの様子を見たら、どうしておれを恐れよう」と思い、すぐに判官に命じた、

「裁判官用の法服¹⁵を持って来い」

悟空はそこで平天九旒冠¹⁶をかぶり、渦状龍紋の長衣を身につけ、絶

12 黄面暦 「黄曆」、「通書」、「通勝」とも称され、日々の干支、吉日厄日、恵方、ある行為がその当日は宜か不宜かなどが列挙されている。

13 初め 原文は「打頭」。楊萬里の「閩門外にて溪船に登る」詩に、「歩下の新船 試水の初め、打頭の攪載 適ま子に逢う」とある。

14 南宋の宰相、高宗（趙構）に仕えて金との講和を進めた。民族英雄の岳飛を処刑したため、古今未曾有の大悪人とされ、『補』の第九回、第十回で、徹底的に罪状が暴かれる。

15 裁判官用の法服 原文は「坐堂衣服」。「坐堂」は役人が出廷して裁判や決裁をすることを指す。『京本通俗小説』「拗相公」に、「毎讀書達旦不寐、日已高、聞太守坐堂、多不及盥漱而往」（いつも明け方まで読書して眠らず、日が高くなり、太守が御出座になったと聞いて、顔を洗いもせずに出仕するのであった）とある。

16 「平天冠」は冕の俗称。『後漢書』輿服志下に、「冕は皆廣さ七寸、長さ尺二寸、前圓後方、朱緑の裏、玄の上、前垂は四寸、後垂は三寸。白玉の珠を係けて十二旒と爲し、其の綬の采色せるを以て組纓と爲す。三公諸侯は七旒、青玉を珠と爲す」とあり、閻羅王の「平天九旒冠」は天子と諸侯の間ということになる。

対に容赦はしない鉄の如き意志を表す靴をはいた。

机には朱塗りの錫製硯が一つ、銅の筆掛けに大きな朱筆が二本、左側に並ぶのは、冥土の下役¹⁷の名札立てが一本、判官総員の名札立てが一本、当直判官の名札立てが一本、その他大勢の鬼卒¹⁸の名札立てが三本。

ただちに五班の鬼判を差し向けた。一組は緑袍判官、青面・青皮・青牙・青指・青毛しんをかりまくの剛秦精鬼五百人を従えている。一組は黄巾判官、金面・金甲・金臂・金頭・金眼・金牙しんをしめくせいするの除秦悪鬼五百名を引き連れている。一組は紅鬚判官、赤面・赤身・赤衣・赤骨・赤胆・赤心あかひげの恥秦精鬼しんをぶじよくするを従えている。一組は白肚判官、白肝・白肺・白眼・白腸・白身・白口しろはらの誅秦小鬼五百名しんをしよけいするを従えている。一組は玄面判官、黒衣・黒裙・黒毛・黒骨・黒頭・黒脚で、ただ心だけが黒くない、搦秦佳鬼五百人しんをむちうつを従えている。彼らは五色に配当され、五行に従って、五方に分かれ、五班に配列、整然と畏志堂の前に直立している。

また一組の雪白頭巾、やせてガリガリ、沈香色の顔付き、銅の鈴の眼をした巡風使者に屋外の東側を警護させ、一組の血点ちぞめの頭巾、やせてガリガリ、粉色色おしろいの顔色、突き出た象の鼻の巡風使者に屋外西側を警護させ、徐判官に総轄させる。

また一組の草の頭に花の顔、虫の喉に風の眼、鉄の手に銅の頭の護送鬼卒六百名を派遣し、崔判官に指導させる。

さらに一組の虎頭虎口、牛角牛脚、魚衣うおのかっこう蛟色の文書送達鬼使百名、一組の賓客を接待する、葱花帽子の陰陽生¹⁹、一組のザンバラ髪をした御簾巻上げ・清掃役の鬼卒二百名、一組の九龍脚、鳳凰頭の奏樂使者七百名がいる。

悟空はそこで小鬼卒に、「鉄製の旗竿を高々と立てよ」と命じた。

17 下役 原文は「皂隸」。『警世通言』巻二十四に、「王知縣見他二人（皮氏と玉堂春）各説有理、叫皂隸暫把他二人寄監。」（王知県は、彼女ら二人の言い分がどちらもそれらしいのを見て、下役に命じて暫時二人を取監させました）とある。

18 鬼卒 原文は「鬼使」。地獄の雑役を担当する。段成式『酉陽雜俎』前集巻十一廣知に、「玉女は黄玉を以て痣と爲し、大きさは黍の如く、鼻の上に在り。この痣無き者は鬼使なり」とある。

19 陰陽生 星占い、易占、風水占いなどを生業とした人をこう呼んだ。ここでは「賓客を接待する」と説明されているので、鬼卒ではなく、たとえば道服などを着た、人間に近い姿形をした接待係なのであろう。用例としては、『古今小説』巻六、「一面分付陰陽生擇箇吉日、闔家遷在新府住居」（陰陽生に命じて吉日を選ばせ、一家全員新邸宅に移り住ませました）がある。

判官が命令を伝えると、簾の外で声をそろえて「うけたまわりました」と返事をし、太鼓の音がひとしきり響き、鉄の旗竿が立てられた。きらきら輝く二枚の白い旗には「報讐雪恨、尊正誅邪」（あだをうち恨みを晴らし、正義を尊び悪人を処刑する）と純金の八字がはっきりと書かれている。

悟空は旗竿が立てられたのを見て、ただちに告示を張り出させた。

正判事孫 天道は恢恢 法律は無情

一切の善を掌どり悪を司どる判使、私を以って公を犯し、自ら嚴網に投ずること母かれ。

三月

某日公示

告示が出されると、簾の外で一斉に叫び声が上がリ、太鼓がひとしきり鳴り響いた。悟空はさらに拘引状を一通出した。

秦檜

判官は跪いて拘引状を受け取り、簾の外へ飛び出し、東側の棟柱に掲げると、簾の外ではどつとどよめき、太鼓の音がまたひとしきり響いた。

悟空はそこで「簾を巻き上げよ」と命じ、鬼使が数人大急ぎで駆け込んできて、鬪虎模様の簾を高々と巻き上げた。見ると多数の判官が各班ごとに整然と、しかも眼光鋭く²⁰、両側に向かい合い並んでいた。

外ではまた太鼓の音がひとしきり、^{ほらがい}海角を吹き鳴らし、雲板石²¹を叩き、大騒ぎのうちに一本の白い紙の旗が送り届けられ、旗に書かれているのは「^{そうをぬすみしぞくしんがい}儉宋賊秦檜」であった。正門²²に着くと正門付きの鬼使が声高に、

「「儉宋賊秦檜」の牌が入ります」

と叫ぶと、簾の外で一斉に応答があり、太鼓の音がひとしきり。またま

ひとしきり
の太鼓の音
は読者の心
を震撼させ
る。

20 眼光鋭く 原文は「鷹視」。『新五代史』卷十五唐明宗子秦王從榮傳に、「然れども、其の人と爲りは輕尙にして鷹視、頗る儒を喜び、學びて歌詩を爲る」とある。

21 雲板石 「雲版石」とも書き、両端が雲状になった打楽器。寺や役所で時を告げたり、人を集める時に用いた。『金瓶梅詞話』第四十八回に、「只聽裡面打的雲板响、開了大門二門」（中から雲板石を叩く音が響き、正門と二の門が開いた）とある。

22 正門 原文は「頭門」。建築物の正門を指す。用例としては、時代は下るが『儒林外史』第四十二回、貢院で郷試が行われる場面に「一直等到晚、儀徵學的秀才點完了、才點他們。進了頭門、那兩箇小廝到底不得進去。」（晩まで待って、儀徵の生員点呼が終了、やっと彼らにまわって来た。正門まで来ると、お付きの小者は結局中に入れなかった）とある。

た海角を吹き鳴らし、雲板石を叩き、殿中の青牙判使がただちに奪邪鐘を打ち鳴らした。

正門では太鼓の音、内門でも太鼓の音、簾の外でも太鼓の音、音が入り乱れている。

正門の鬼使が声高に「秦檜が入ります」と叫ぶと、簾の内側の五組の鬼判、簾の外側の多数の鬼使が、声をそろえてコラァッと怒鳴りつけ、その響きは雷いかづちのよう。

太鼓の音が止むやいなや、悟空はただちに、

「秦檜の縄目を解け、事細かに尋問だ」

と命じた。決まった職分を持たない、威風堂々たる鬼卒千名があわてて縄目を解き、秦檜をひつつかんで石畳に引き据え、何回か蹴りを入れた。

秦檜は床にひれ伏し、声も上げられない。悟空はそこで大声一番、

「秦丞相、さあどうぞ」

(評) 悟空が威儀を正した場面は一々抱腹絶倒だ。

前回の訂正

第四回の脚注10と11が重複していました。11の脚注「天字第一号…」を以下のように訂正します。「廷対 もともと朝廷で皇帝の諮問に答えることを意味したが、宋代に皇帝が直接関与する殿試が設けられるとそれを指すようになった。陸游『老學庵筆記』卷七に、「慶曆中、河北の道士賈衆妙相を善くす。…豫章の黄庠の手を見て曰く、左手に龍爪を得たり、當に天下に魁たるも仕えざるべし。若し右手にこれを得れば、則ち貴しと。庠果して南省第一と爲り、廷對に及ばずして死す」とある。」また、124頁(第四回)の本文下から七行目「青い石」に、「原文は「青石」。『藝文類聚』卷六十二・居處部・宮に引く『神異經』に、「東方に宮有り、青石を以て牆と爲す。高さは三仞、左右の闕は高さ百丈、畫くに五色を以てし、門には銀榜有り、青石碧鏤を以てし、題して天地長男の宮と曰う」とある。荒井健先生示教。」という脚注をつけます。